

精神疾患を持つ利用者の 「人生に前向きになった」過程分析

－ 実践における複線径路等至性アプローチ（TEA）を 用いた質的研究 －



訪問看護ステーションいろはす
作業療法士 岩岡 拓人 八重樫修人 大鐘悠歌
日本医療大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
作業療法士 村上正和

1.背景と現状

- ・精神疾患を抱える人々の人生経験は多様であり,発症に至る経緯やその後の生活の変化,回復過程は**個人によって大きく異なる**.
- ・それぞれの**人生経路を詳細に分析することで,心理的回復に寄与する要因を明らかにすることができる**.



その一方で

家族や支援者を対象とした先行研究は多いが,
当事者の**人生の経路分析に基づく支援の報告は限られる**

2.研究目的

- ・ 今回，摂食障害を持つ利用者**1名**を担当
- ・ 「**人生に前向きになった**」との発言を聞くことができた

目的

- ・ 対象者の語りから「**人生に前向きになった**」という**到達点**に対する変化がどのような経緯で生じたのかを明らかにすること。
- ・ 分析結果をもとに，よりよい支援を検討すること。

3.研究方法.研究対象

【一般情報】

A氏 30歳 女性

【現病歴】

平成23年より摂食障害および統合失調症を発症し,過食嘔吐,被害妄想,醜形恐怖,低カリウム血症,急性膵炎の診断を受けた.

【生活歴】

幼少期はB県で過ごす.両親の離婚によって,県外のC市に引っ越した.

【倫理的配慮】

守秘義務・同意の説明に関する書面を説明し,同意を受けた.

4.研究方法.分析方法

【研究デザイン】 質的研究

理論的枠組み：複線径路等至性アプローチ(以下,TEA)

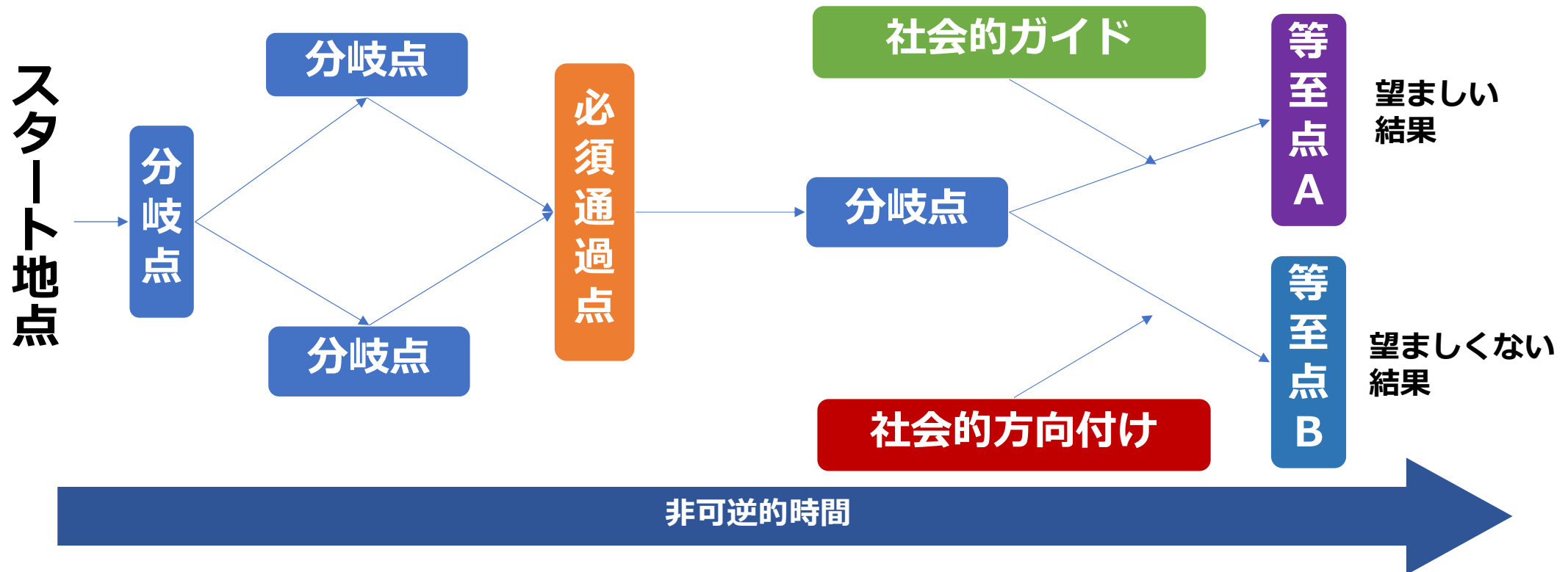
【データ収集】

研究対象者の自宅でインタビュー（1回60分に設定）.
半構造化面接：聴取した内容を録音しテキストデータ化.

【分析方法】

SCAT（カテゴリー化）→TEM図への統合.

複線径路等至性アプローチ：TEA



- ・「人それぞれが、異なる経路をたどりながらも、最終的には同じ到達点に至る」という考えに基づく。
- ・時間とプロセスを重視し、径路の多様性を可視化。

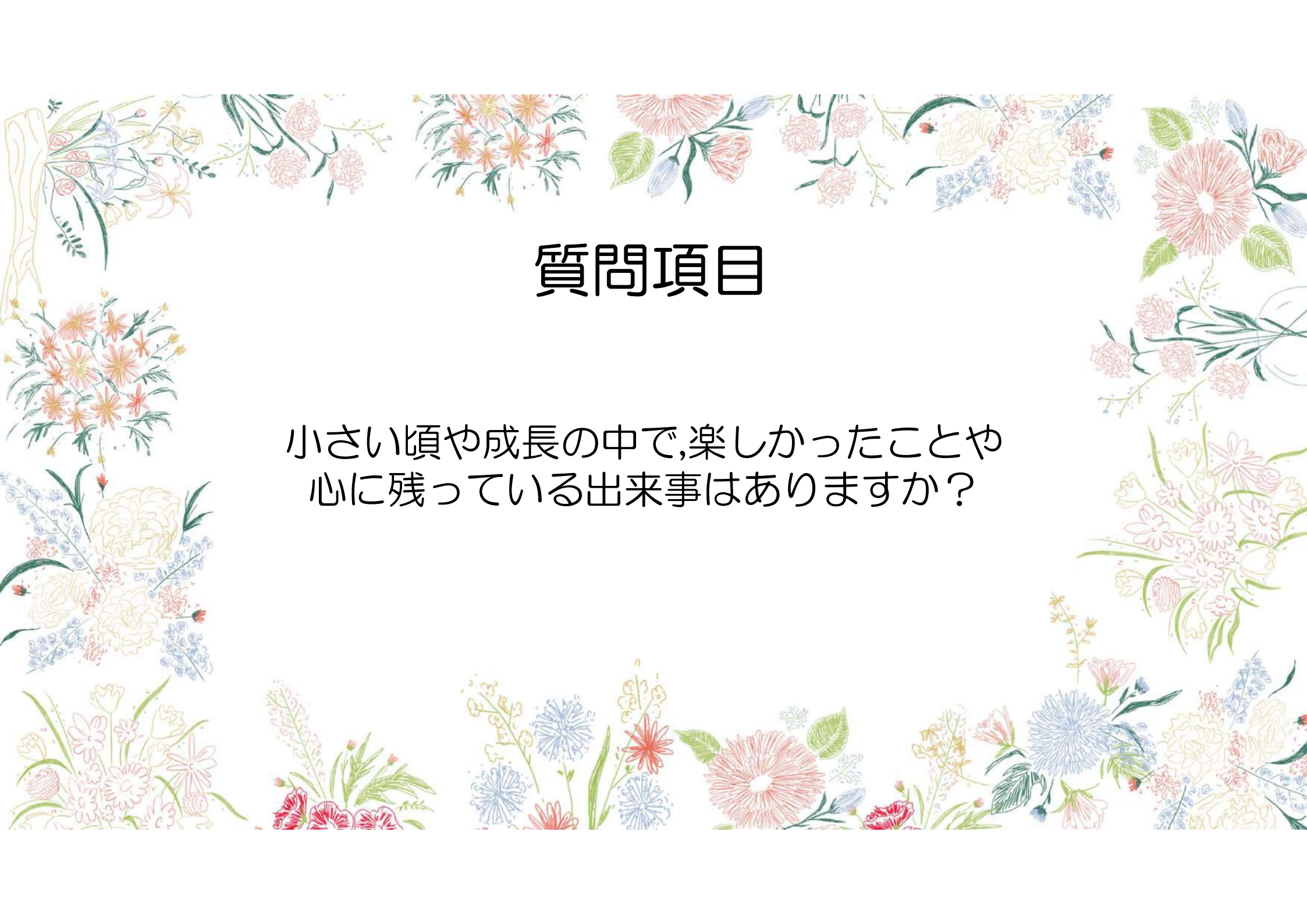
5.研究方法.半構造化インタビューの実施内容

人生に前向きになれたことを**GOAL**に質問内容を選定

- 1.これまでの人生で、特に印象に残っている出来事.
2. 生きづらさを感じた時期や出来事. その時の状況.
3. 周囲の人々との関係が変化した経験. それがA氏に与えた影響.
4. 「人生に前向きになった」と感じた具体的なきっかけや出来事.

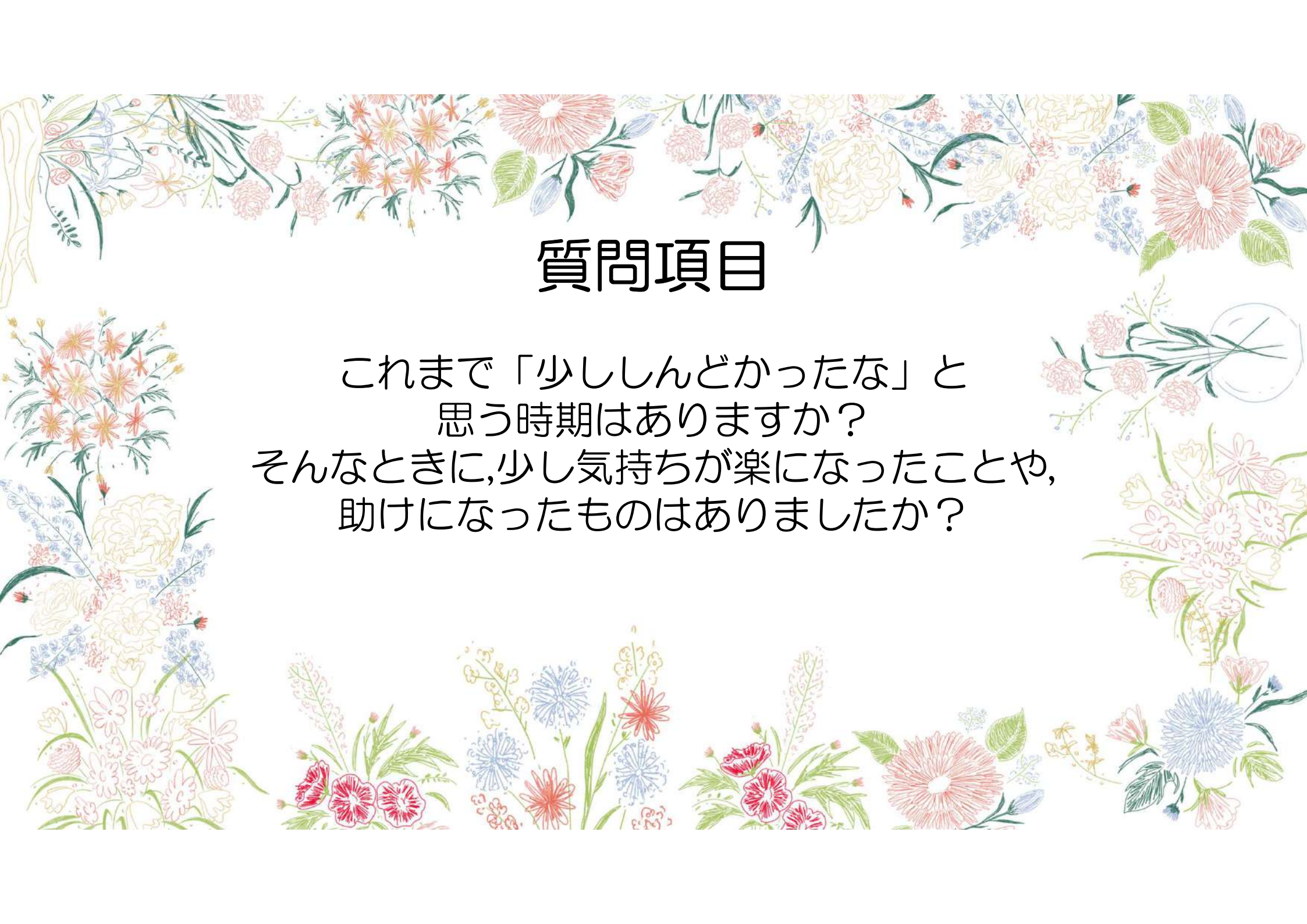


研究対象者の心理面を考慮した質問内容に変更
話が脱線しないよう、質問内容をモニターに表示しながら面接



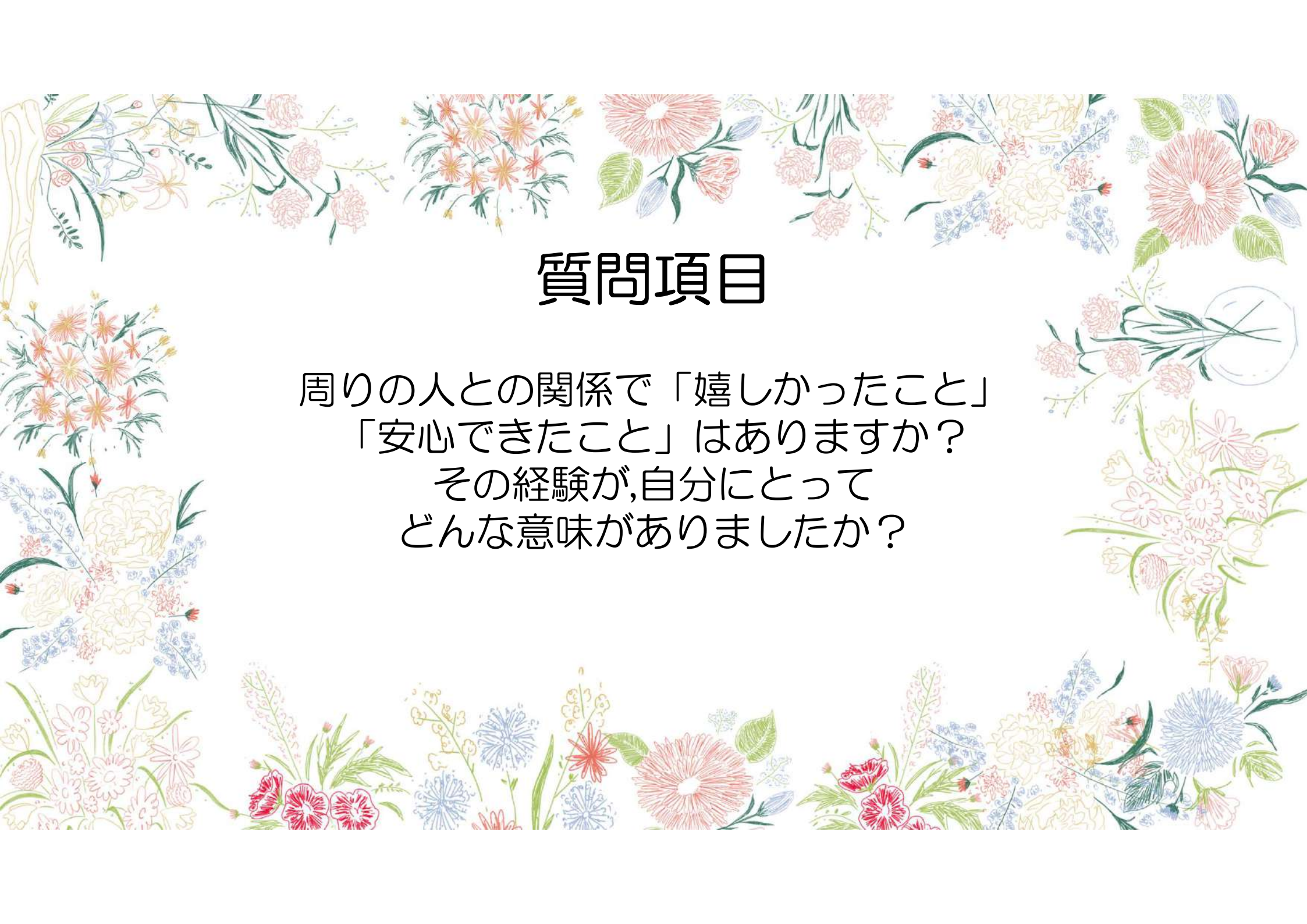
質問項目

小さい頃や成長の中で、楽しかったことや
心に残っている出来事がありますか？



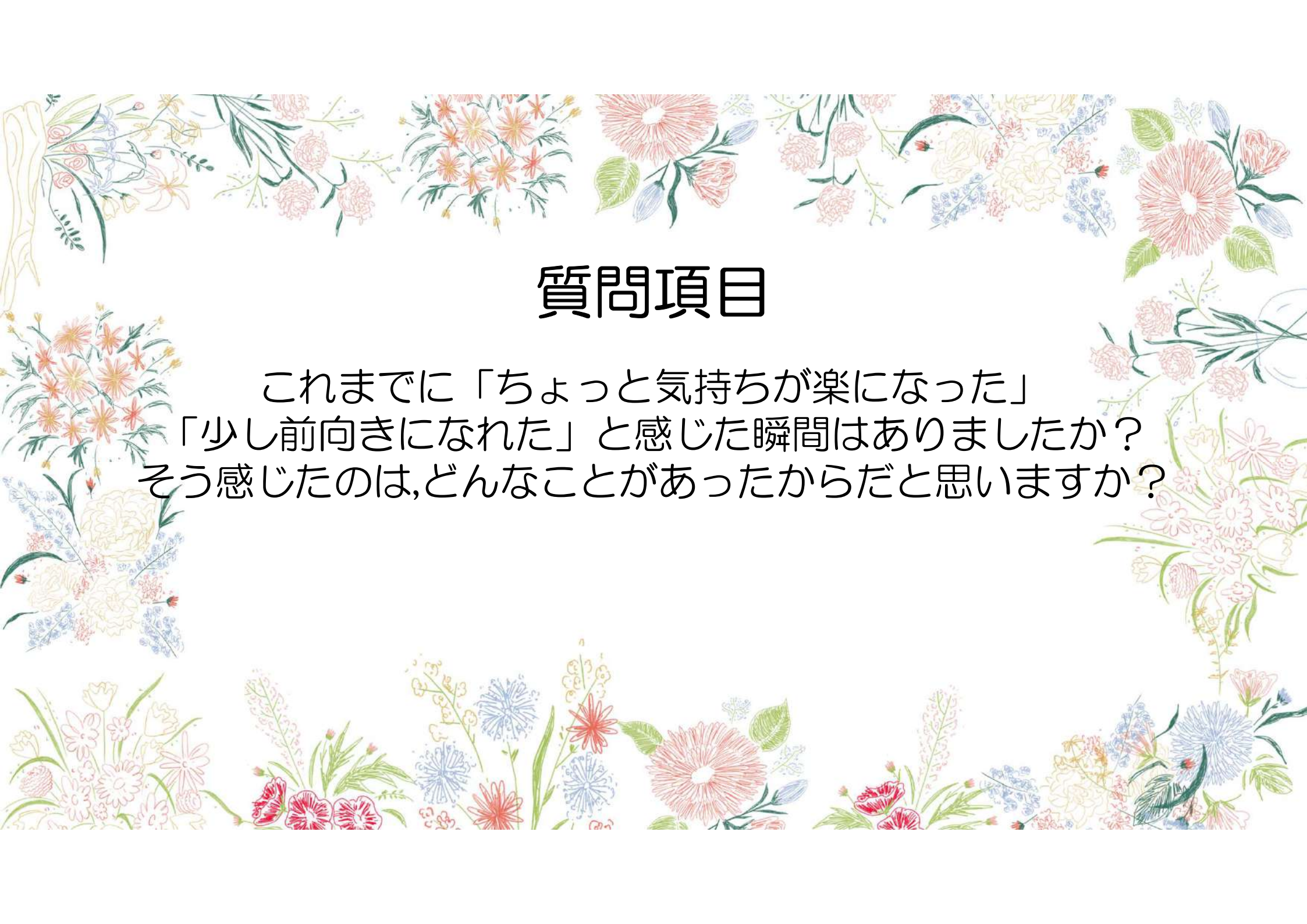
質問項目

これまで「少ししんどかったな」と
思う時期はありますか？
そんなときに、少し気持ちが楽になったことや、
助けになったものはありましたか？



質問項目

周りの人との関係で「嬉しかったこと」
「安心できたこと」はありますか？
その経験が、自分にとって
どんな意味がありましたか？



質問項目

これまでに「ちょっと気持ちが楽になった」
「少し前向きになれた」と感じた瞬間はありましたか？
そう感じたのは、どんなことがあったからだと思いますか？

6.結果 SCAT分析・カテゴリ分類

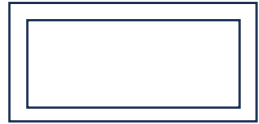
抽出語句	抽出語句の要約	含意意味	カテゴリ
父親の会社に行ったこと	父との特別な時間	安心と愛着の記憶	幼少期のポジティブな体験
父親とカレーうどんを一緒に食べた	楽しい外食体験	家族との結びつき	幼少期のポジティブな体験
父親とトラックに乗って同行した	父と一緒にの経験	承認・共有体験	家族との信頼関係
学校生活でいじめにあう	対人関係の困難	孤立・自己否定感	社会的孤立と心理的影響
両親が離婚して,c市に引っ越した	父や出身地との別れ	家族との孤立	幼少期のネガティブな体験
漫画を見て拒食症になってしまう	精神疾患の発症	精神疾患のきっかけ	精神疾患の病的経験
神様と呼べる旦那に出会って結婚する	支えられる関係性	無条件の受容	回復を支える対人関係
友人2名と出会えた	共感的な他者とのつながり	理解されることの安定感	支援的関係性の形成
少し食べ残しても大丈夫と思えるように	完璧主義からの解放	柔軟な自己受容	食行動と自己認知の変化
周りの支えで少しずつ変わった	支援による変容	社会的支持の重要性	環境による心理的変容

7.TEAで用いた記号



行動・経験

その時経験したことや行動



必須経験点
(OPP)

必須のこととして経験される出来事



分岐点(BFP)

ある選択により経験が多様に分岐する

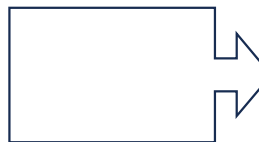


選択されなかったが
ありえた行為・経験



等至点 (EFP)

多様な経験が収束する状況



社会的助成

等至点へ至るように働く力

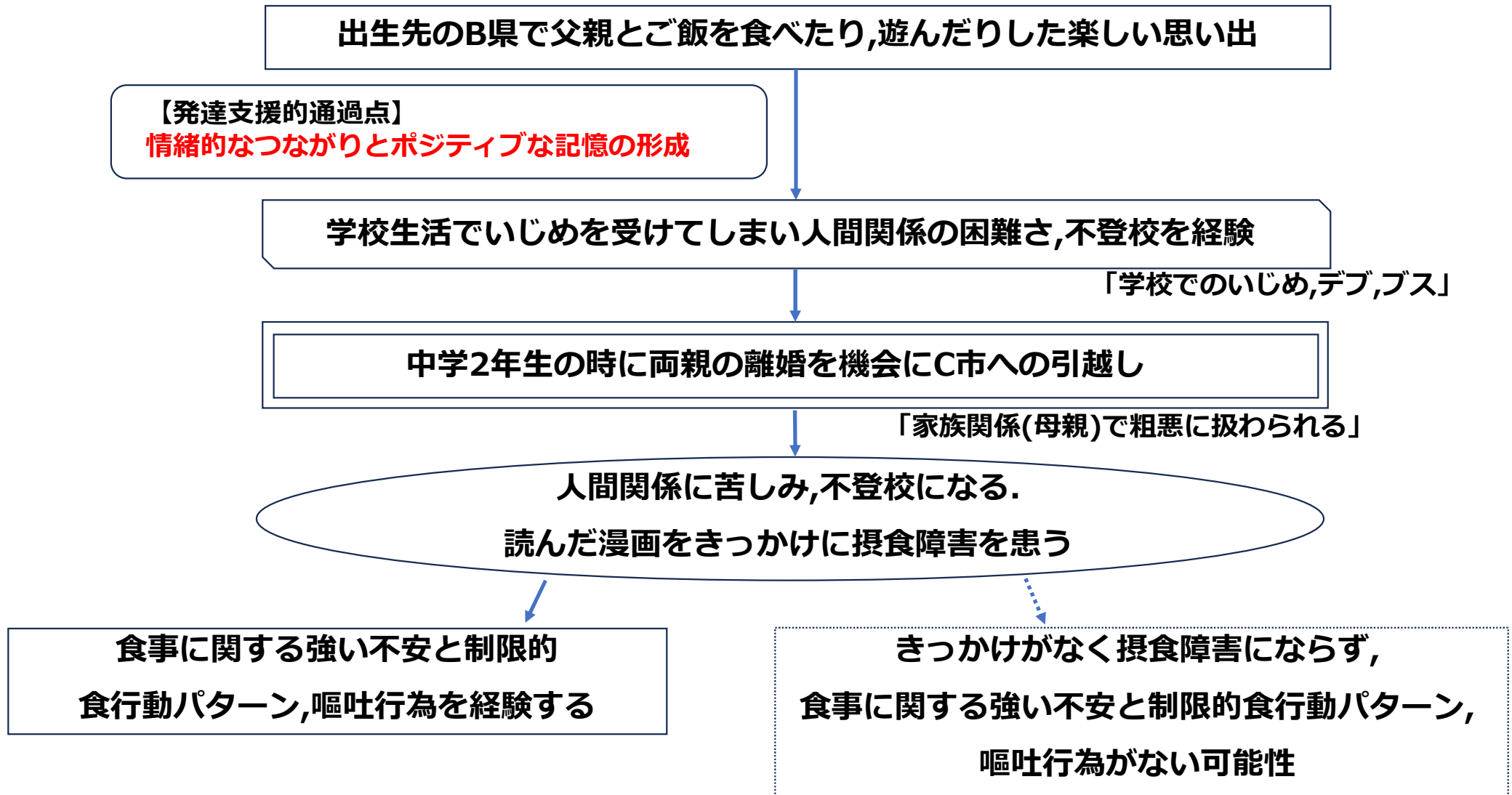


選択した経路

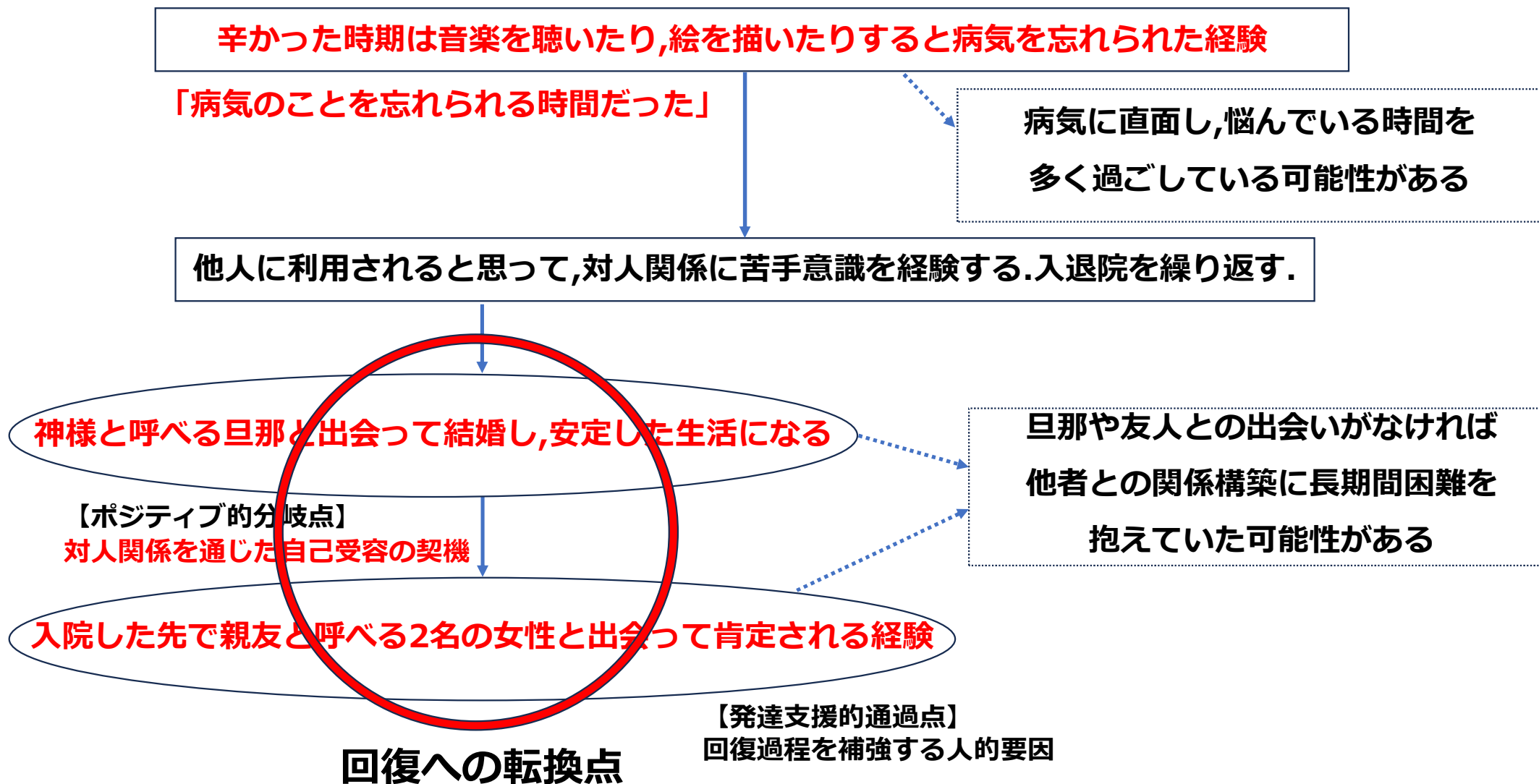


選択しなかった経路

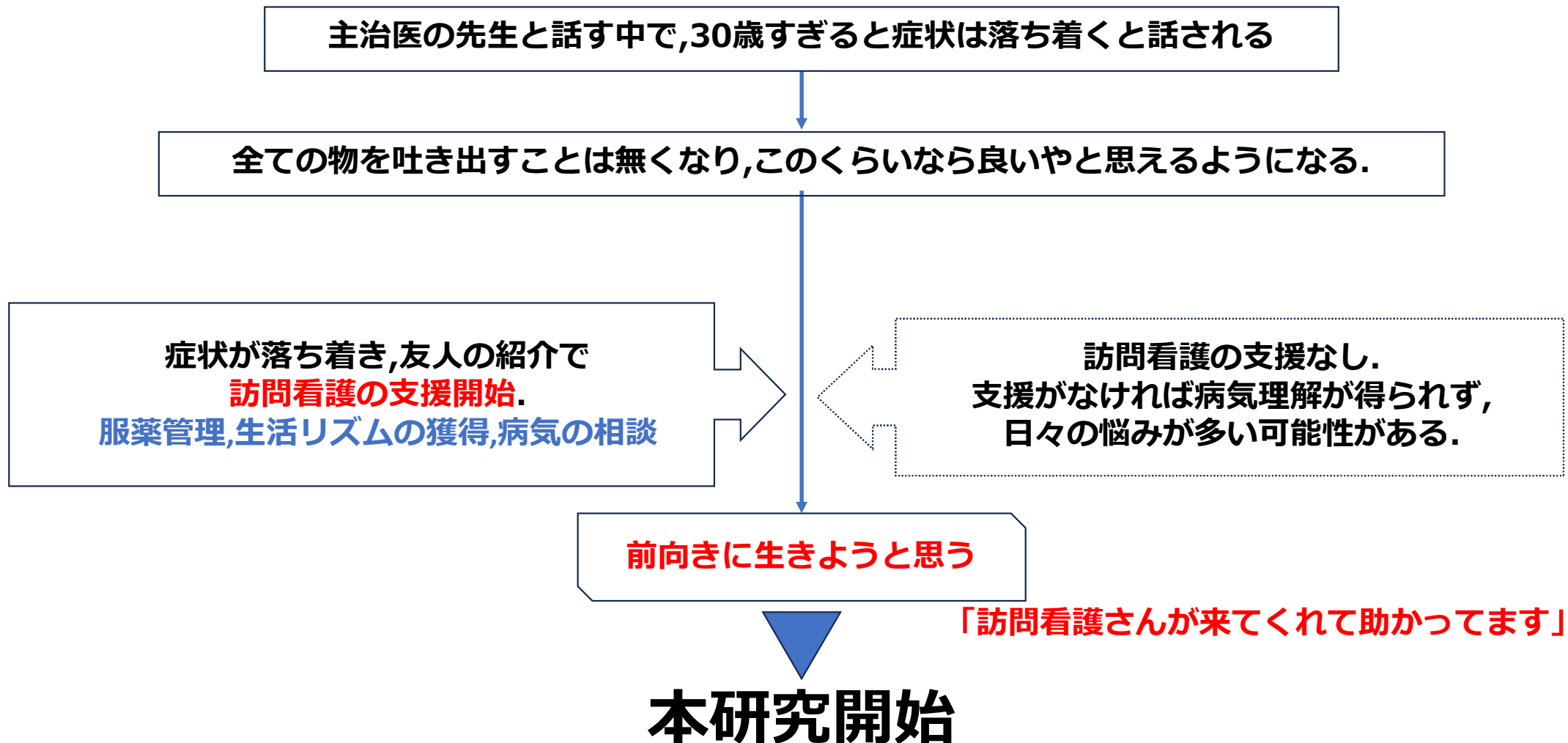
8.結果 TEM図 幼少期



8.結果 TEM図 回復への転換期



8.結果 TEM図 社会的助成構築期



9.考察 TEAから見えたA氏が前向きになれたポイント

1. 夫や友人など、信頼できる人間関係の構築
2. 音楽を聴く、絵を描くことが症状を和らげる作業



これらを訪問リハビリテーションに組み込むことで
A氏の支援を強化できる可能性

9. 考察 TEAから得られた支援方針

活動レベル

TEA実施前の看護師と作業療法支援は、
服薬管理、生活リズムの獲得、病気の相談

活動レベルでの抽象的な支援から、
過去の経験を活用した支援へと変更

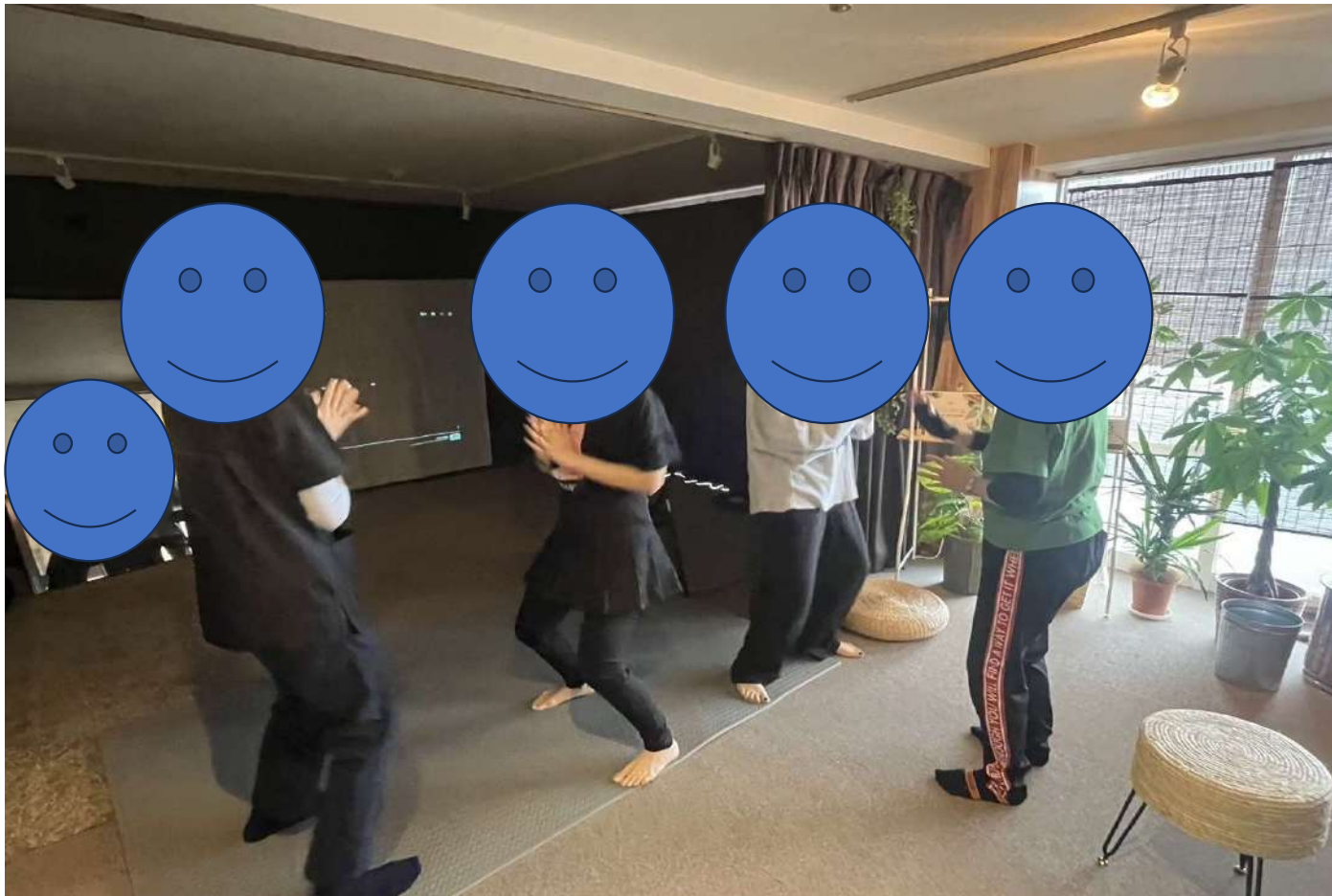
参加レベル

絵による表現(病気を忘れられた経験)
語りを受け止める支援者の存在(旦那や友人)を
活用した支援を提供



現在,余暇活動のイラスト作りは習慣化し,積極的に実施

**精神疾患に理解のある作業療法士が開催する
通いの場に対人交流機会を増やす目的で参加する。**



9.考察 先行研究との比較

<TEA分析の結果>

語りを受け止める支援者の存在

「他者への信頼感を再構築し、
自己を肯定する」契機

<先行研究>

摂食障害回復者は、
「他者に合わせる自己」から
「自己基準の行動」へと
移行するプロセスを
肯定的な対人関係から示す

(貝塚,2021)

共通点：肯定的な対人関係が重要な転機



夫や友人との出会いにより、ネガティブな内的対象関係の
再演構造を超えて新たな肯定的対人関係のモデルを形成したことが、
「人生に前向きになった」ことの要因であったと考える。

10.本研究のまとめ

- ・ TEAを活用することで、前向きになったと感じる過程分析を把握することができた。
- ・ 本分析により、活動レベルでの抽象的な支援から、過去の経験を活用した参加レベルでの支援方針に転換することができた。

ご清聴,ありがとうございました.

